

※解答はすべて解答用紙に書くこと。

※字数制限のある問題は、特に指定のない限り、句読点や記号も字数として数えること。

二 次の文章を読んで以下の問いに答えなさい。

近ごろの子どもはずいぶんいいが、いい思いをしているようにみえる。習い事もあれば、お気に入りの連続テレビ番組もある。携帯電話でのつきあいもある。退屈しているひまもないことだろう。

わたしが子どものころは、一日がとても長かった。で、すぐに退屈する。が、ひとはところが退屈すると、からだのほうに先にむずむずしてくる。エネルギーが余っている子どもならよいだろう。

④ 子どもは、おもちゃやゲームソフトがなくとも、紙や空きびんといった手近にある物で遊び道具を作りだし、ルールもじぶんたちで作って、遊ぶものだ。端から見るとどんなゲームなのかはよく分からないが、彼らの頭のなかにはルールがきちっとセットされているのだろう。想像力が物にいのちをふきこみ、大人の眼にはどんな取るに足りないものが、子どもたちには大きな意味をもつ。

想像力というと、まずはファンタジーとかファンシー、つまりは空想の物語が思いつく。が、想像力とはいまここにはないものをおもうことだとすると、それは人間のもっとも基本的な能力であるといえる。未来への希望や期待も、過去の記憶も、まだないもの、もうないものを現在にたくり寄せるという意味では、想像のはたらきである。

このはたらきが、⑤ 科学を生みだす。科学的探求とは、物の衝突や落下、樹が芽を吹きやがて枯れる様子、気象の変化、物の組成など、眼にⅠ 物や出来事の背後に、眼にⅡ ある法則や構造を読みとろうとするいとなみだからだ。与えられたもの、眼にⅢ もので満足していたら、科学は始まらない。

また、想像力というものは、優しさの温床（ある物事または思想などが生まれ育ちやすい環境のこと。）でもある。優しさというのは、相手のいまの気持ちにこまやかに想いをはせる、気を配ることができるといふことだからだ。

そういう想像の力を育むのに、なにも芸術的感受性のトレーニングなどといった特別な算段は必要ない。むかしのひとは、そんな教育プログラムをわざわざしつらえる余裕もなかった。

① 生活の最低のプログラムのなかに想像力を育むチャンスというのをきっちり設定していた。

食事時である。いまはいそがしい子どもに合せて、その合間に効率よく食事をするようセッとするのがまるで優秀なママのわざのようになっているが、むかしのお母さんはただ食事時にきちんと家に帰ってくることをきつく命じた。家族のみなといっしょに食べないものなら、こっぴどくしかられた。

約束を守るといふ、ひとのあいだで生きるための最低限のルールを教えるということもあつただろう。が、それ以上に食事をいっしょにとるといふことじたいを重視していたのは、④、そのことに、他人の見えない心もちに想いをはせるという、想像力のもっとも基本的なはたらきを、あるいは日常的にくりかえされるあたりまえの行為のなかで教えるという意味を、見いだしていたからであろう。目の前にひろがる光景や、あたりを包む音、あたりにただようかおりとかとちがつて、味覚というのは他人と共有しにくい。同じものを食べているのに、それがほかのメンバーにはどんな味かしているのか、じかに確認できないのだ。だから母親は同じレシビ（料理の材料や調理法のこと）で毎週のように作るカレーライスですら、そのつど子どもに「どう、おいしい」とたずねる。同じように、家族で食事をとるときには、「ちよつと、辛い」「わたしも…」といったぐあいに、それだけが、他人がじかに感じられない味覚を報告しあう。そういうなかで、他人への想像力がみられるのだ。

② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

科学や政治や芸術といった、あるいは障がい者や高齢者のケアといった、とりわけ想像力をつよ

く必要とするいとなみは、こんな「④小さな学校」のなかからこそ育ってくるのだろう。

問一、空らん③、④、⑤に入る言葉として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。（ただし、同じ記号を二回以上使ってははいけません。）

- ア そして イ けれども ウ だから エ そのうえ
オ たしかに カ たとえば キ つまり ク きつと

問二、線部①「生活の最低のプログラム」と同じ意味の言葉を本文中から十五字以上二十字以下でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問三、空らんⅠ、Ⅱ、Ⅲにはそれぞれ「見える」「見えない」のどちらかが入ります。それぞれにあてはまるものとして最も適当な組み合わせを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア Ⅰ…見える Ⅱ…見える Ⅲ…見えない
イ Ⅰ…見える Ⅱ…見えない Ⅲ…見える
ウ Ⅰ…見える Ⅱ…見えない Ⅲ…見えない
エ Ⅰ…見えない Ⅱ…見える Ⅲ…見える
オ Ⅰ…見えない Ⅱ…見える Ⅲ…見えない
カ Ⅰ…見えない Ⅱ…見えない Ⅲ…見える

問四、―線部②「そういうこと」が示す内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 同じ味付けでも人によって感じ方は異なるので、きちんと言葉で確認しあわなければならないこと。

イ いっしょに食事をとるからこそ、味の感じ方などを報告しあい、それを通じて家族のコミュニケーションはみがかれるということ。

ウ いっしょに食事をとるからこそ、味の感じ方などを報告しあい、それを通じて他人への想像力はみがかれるということ。

エ 同じ味付けでも人によって感じ方は異なるので、それぞれの感じ方を確認することで、料理の作り手としての母親の想像力はみがかれるということ。

オ 同じ味付けでも人によって感じ方は異なるので、それぞれの感じ方を確認することで、他人と共有しにくいものを共有しようとする意識がうまれるということ。

問五、空らん③にあてはまるものとして最も適当な言葉を本文中から十字でぬき出して答えなさい。

問六、本文で筆者が一番言いたいことは何ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 科学は想像力によって生みだされたものであり、今後の科学の発展のためにも、想像力は大切なものである。

イ むかしのひとは余裕がなかったため、やむをえず食事時などの日常的な行為によって想像力を育もうとした。

ウ いまの子どもたちはむかしにくらべていそがしく、それゆえ想像力を育むチャンスがなくなっているようなので改善したほうがよい。

エ 日常的な行為のなかで求められる最低限のルールを教えることで、想像力というものはみがかれていくものである。

オ 想像力は大切なものであるが、特別なトレーニングがなくても、日常的な行為のなかでも養われていくものである。

カ 味の感じ方など、他人と共有しにくいものを報告することが想像力をみがく上で大きな役割を果たす。

問七、筆者は本文において、「想像力」とはどういうはたらきのことだと言っていますか。「〜こと」に続くかたちで本文中から十七字でぬき出して答えなさい。

問八、―線部④「小さな学校」と呼べるものとして、食事時や生き物を飼うこと以外にはどんなものがありますか。そう呼べるものを一つ挙げ、解答らん(1)に書きなさい。また、そう呼べる理由を四十文字以上六十文字以下で、解答らん(2)に書きなさい。

二 次の―線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- ① コウセイに名を残す人物を目指す。
- ② これはカツキ的な発明品だ。
- ③ インサツ機を新しくする。
- ④ 彼のコウセキをたたえる。
- ⑤ 博物館にシヨゾウする秘宝。
- ⑥ あのハイユウの演技はすばらしい。
- ⑦ 銀行にお金をアズける。
- ⑧ 大きなカンラン車で有名な遊園地。
- ⑨ みんなで朗らかに歌おう。
- ⑩ 拾得物を警察に届ける。

三 ノブオ(「僕」^{ぼく})は、野球選手^{ながしましげお}の長嶋茂雄が大好きな小学生です。野球チームに所属して、サードを守っています。ノブオのチームメイトで親友でもあったナルシゲの家は、大きな魚屋を営んでいましたが、父親が事件を起こして逮捕^{たいほ}されてしまい、ナルシゲは遠くに転校することになってしまいました。ただ、その後もノブオとナルシゲは、手紙のやり取りをしています。ある日、ノブオはナルシゲが自分をたずねて近くに来ていることを聞きつけます。さっそくノブオはグローブとボールを手の方を探しますが、ナルシゲの姿はなかなか見当たりません。そこでノブオは、よく二人で野球の練習をした氷川神社に行ってみることにしました。次の文章はそれに続く部分です。これを読んで以下の問いに答えなさい。

氷川神社の階段の上にナルシゲくんは座っていました。僕は階段を一段ずつ上がっていきましたが、ナルシゲくんは僕に気づかずグローブ^{ぐろーぶ}の紐^{ひも}を真剣^{けん}に結び直しています。

「ナルシゲくん」

僕は階段の下から呼びました。

「おお、ノブオくん」^{おどろ}

ナルシゲくんは驚いた顔つきで、階段から立ち上がりました。

僕は残りの階段を駆け上がりました。

「ナルシゲくんどうしたんだよ？」

「きちやっただ。ノブオくんから手紙の返事をもらったら、ノブオくんにどうしても会いたくなっちゃった」

「僕も会いたかった」

ナルシゲくんは体がもつと大きくなっていました。声も低音になっていて、とても響^{こび}いてきます。肩幅も大きくなってがっちりしています。

「ナルシゲくん、キャッチボールやろうよ」

「おお、やろう！ やろう！」

ナルシゲくんは右腕をぐるぐる回しました。ナルシゲくんも僕も軽く投げはじめました。久々に受けるナルシゲくんの球です。僕も久々にナルシゲくんに投げる球です。僕は久々のナルシゲくんにもちよつと照れていて、本気で投げるのにも照れています。

ナルシゲくんの投げる球も照れていて、急に速い球を投げて驚かしてはいけないと思っっているみたいです。

ゆつくりゆつくり二十球ぐらい投げるとナルシゲくんも僕も照れが取れてきました。僕のほうから強く投げました。①ナルシゲくんはびしつと受け取ると、球をじつくり握って強く投げ返してきました。かなりのスピードです。前よりも伸びがあり球がずしつとききます。

「ナイスボール！」

ナルシゲくんはにっこり笑いました。ナルシゲくんとキャッチボールが終わったら、今度いつできるかわかりません。今です。今だけです。一球一球が大切です。ナルシゲくんの投げる球をちゃんと見てしっかりと捕るのです。ナルシゲくんも僕と同じ気分です。その証拠にナルシゲくんは僕の投げた球を④して両手でしっかりと捕っています。

僕はキャッチャーになってナルシゲくんの球を捕りたくなりました。座ってグローブを出して大きく構えると、ナルシゲくんは思いきって投げ込んできました。

びしつとききました。

手の平が痛いのです。

痛くても気持ちいいです。

②痛いのが気持ちいいです。

ナルシゲくんは前よりも投げるときに右肘が上がっていて、投げ終わった瞬間は力が入り過ぎて体が左に傾きますが、それがカッコいいのです。

ナルシゲくんの投げる球はぐんぐん速くなつてきます。僕がグローブの構えたところに球がびつときます。コントロールも最高です。僕は汗が吹き出してきました。ピッチャーのナルシゲくんはとつと汗が吹き出て、顔は真っ赤です。

いつのまにか、日が暮れていました。

ナルシゲくんと僕は氷川神社の階段を下りていきました。

「ナルシゲくん、これからどうするの？」

「母さんと喧嘩しちゃったんだ」

「家出？」

「まあ、家出みたいなものかな」

「だったら僕んちに泊まりなよ。そうだよ。ぜったいに僕んちに泊まりなよ」

「いいかな」

「いに決まってるじゃない」

「ありがとう」

「じゃあ、僕のアパートにしようよ。③僕のアパートまでの道、ナルシゲくん、覚えてる？」

「覚えてるよ」

僕はナルシゲくんの知り合いに会わないことを祈っています。すれ違う人が気になって仕方ありません。ナルシゲくんの家はこの町でいちばん大きな魚屋だったので、みんな買いにいらした。僕はバツタリ誰かに会ったらどうしようと思っ歩いていました。でも、ナルシゲくんは僕以上にどうしようどうしようと思っているはずですよ。でも、僕と一緒に、そんな気持ちを抑えてナルシゲくんは歩いていきます。

踏切まで誰にも会いませんでした。

「この踏切なつかしいなあ。相変わらず開かずの踏切だね」

④ナルシゲくんと僕は踏切が開くのをじつと待っています。人がどんどん溜まってきました。ナルシゲくんの知り合いに会う可能性があります。しかも踏切はナルシゲくんの魚屋があった場所から近いのです。

踏切が開きました。ナルシゲくんと僕は踏切を渡って、左に曲がって、商店街に入ろうとしたら、

「僕の家、今どうなっているの？」

とナルシゲくんが聞いてきました。

「スパーになったよ」

「通りたくないな」

「じゃあ、遠回りしていかうか」

僕は商店街を左に曲がらずに右に曲がりました。

「ノブオくん、やっぱり、僕の家がどうなっているかちゃんと見ていくよ」

ナルシゲくんは商店街に戻っていきます。僕は黙っています。ナルシゲくんも黙っています。商店街を歩いていくと、左側に大きなスパーが見えてきました。ナルシゲくんは⑤して、「マルエースパー」という看板を見えています。

ナルシゲくんは立ち止まりました。

「ノブオくん、僕の家、ぜんぜん変わっていてよかったよ。僕の家がそのまま目の前にあったら、泣きだしていたよ」

僕はナルシゲくんの言葉に涙が出てきました。ナルシゲくんの男らしさに涙が出てきました。

⑤僕なんかへなちょこです。僕なんか薄っぺらです。

ナルシゲくんはスパーから目を離し、あたりをぐるぐる見渡していると、何かを見つけています。じつと見つめているうちにナルシゲくんは⑥かがみこんで大きな声で泣きはじめました。

「ナルシゲくん！」

僕が呼んでもナルシゲくんは泣きやみません。④泣き崩れて「僕、やっぱりこの町で野球やりたかった。みんなと野球やりたかったよ」と泣きながら言いました。

⑥僕なんかへなちよこです。僕なんか薄っぺらです。

(ねじめ正一『長嶋少年』・一部改変)

問一、空らん①、②、③、④に入る言葉として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二回以上使ってははいけません。)

ア 地面におでこをくつつけるように

イ 地面に崩れるように

ウ 拝むように

エ 見上げるように

問二、―線部①のようにナルシゲがした理由は何ですか。「うだから」に続くかたちで、本文中から七字でぬき出して答えなさい。(句読点はふくみません。)

問三、―線部②、③のときのノブオの気持ちを説明した文として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

②ア 力強い投球に転校先でのナルシゲの順調な生活ぶりが読みとれて、ようやく安心している。

イ 力強い投球にこのキャッチボールに対するナルシゲの思いが読みとれて、心地よく感じている。

ウ 力強い投球にナルシゲが今も野球に励んでいることが読みとれて、自分も負けまいとしている。

エ 力強い投球にナルシゲの割り切れない思いが読みとれて、それを受ける自分に満足している。

オ 力強い投球にピッチャーとしての才能が読みとれて、他校に転校してしまったことを嘆いている。

カ 力強い投球に母親に対する怒りが読みとれて、果たして仲直りできるだろうかと心配している。

③ア ナルシゲがアパートまでの道を覚えているはずがないとあきらめる気持ち。

イ ナルシゲにアパートまでの道を思い出させてどうにか喧嘩のことを忘れさせようとする気持ち。

ウ ナルシゲがアパートまでの道を忘れないほど自分を記憶に留めてほしいと期待する気持ち。

エ ナルシゲにアパートまでの道を歩かせるときつと知り合いに会おうと予想する気持ち。

オ ナルシゲがアパートまでの道を忘れていたら今晚は家に泊めないことにしようと試す気持ち。

カ ナルシゲにアパートまでの道にあるスーパーを見せないようにしようとする気持ち。

問四、次の文は―線部④のときのノブオの気持ちを説明したものです。空らんに入るものとして最も適当な言葉を本文中から二十字以下でぬき出して答えなさい。(句読点はふくみません。)

二十字以下
を願う気持ち。

問五、ナルシゲはノブオのことを気づかっています。ノブオがそのことを読みとったナルシゲの言葉として、最も適当なものを―線部の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「おお、ノブオくん」

イ 「ナイスボール！」

ウ 「母さんと喧嘩しちゃったんだ」

エ 「まあ、家出みたいなものかな」

オ 「この踏切なつかしいなあ。相変わらず開かずの踏切だね」

カ 「僕の家、今どうなっているの？」

問六、―線部⑤のようにノブオに感じさせたナルシゲの行動として、適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア スーパーになったかつての自分の家の前を通りたくないと言ったこと。

イ やっぱり自分の家がどうなっているのか見たいと前言をひるがえしたこと。

ウ 商店街の方に戻っていったこと。

エ 黙って商店街を歩いていったこと。

オ 「マルエースーパー」という看板を見たこと。

カ 自分の家が全く変わってしまったてよかったと言ったこと。

問七、―線部⑥のようにノブオが感じたのは、なぜですか。ナルシゲの気持ちに変化する過程について触れながら、五十字以上百字以下で説明しなさい。

氏	名

[illegible]

二		
⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
	⑦	③
	⑧	④

[illegible]